

Campus

220

全代会の広報誌

Jan. 2020

開かれた大学の入り口をリ・デザインする

入試改革に向けて

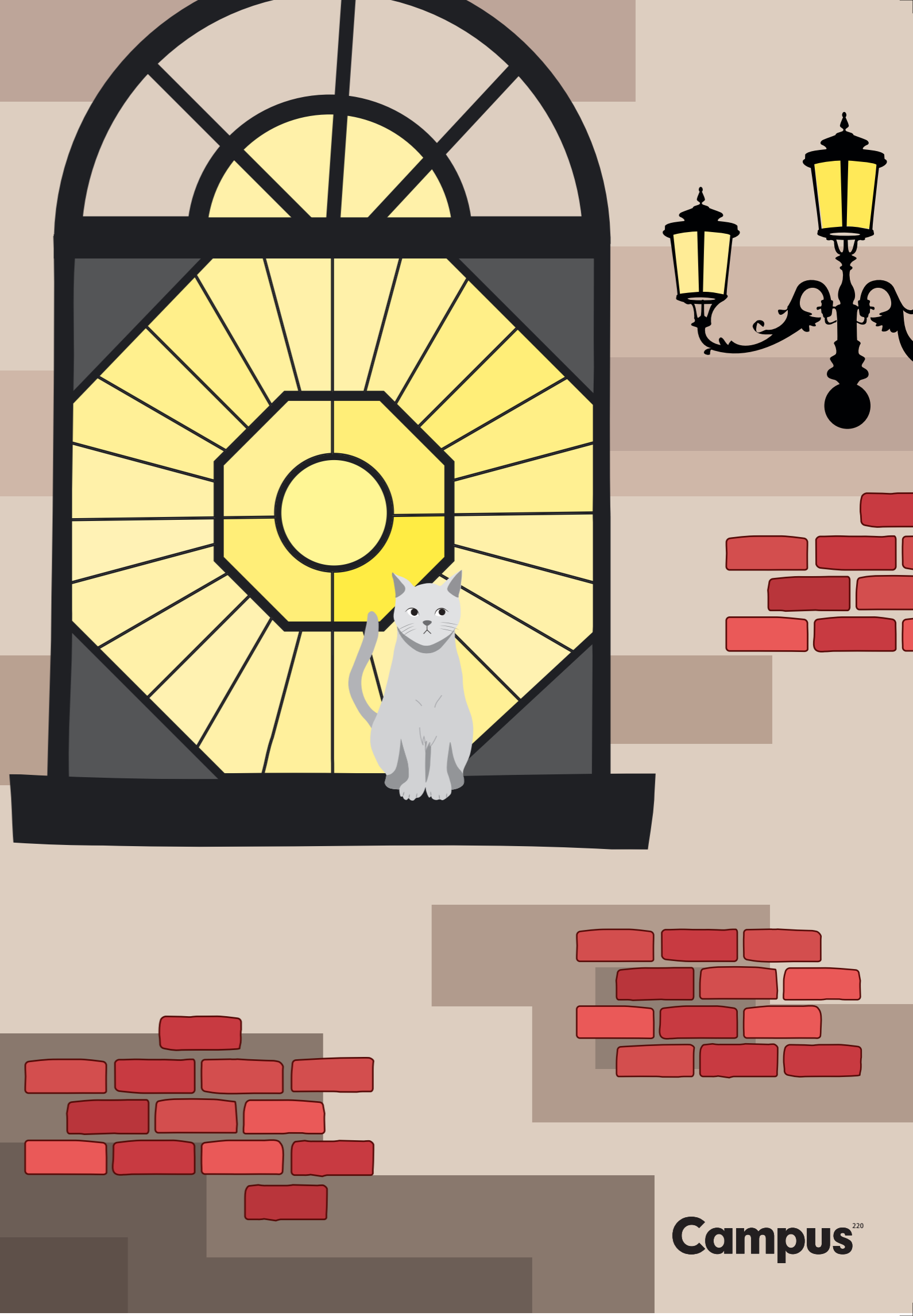
年中行事のルーツをみつめなおす

私たちの文化を改めて知る

社会問題解決の“Math”ter Key

【連載特集】各学類・専門学群を知ろう!

全代会活動報告



年中行事のルーツをみつめなおす - 私たちの文化を改めて知る -

令和の時代となって初めて訪れる新年。今年は東京オリンピックも開催され、海外の人も多く日本を訪れる。このように「日本」が世界的に大きく注目を集める中で、日本に住む我々が日本についてより深く知っていく必要があろう。今回は日本の年中行事に焦点を当て、「日本とは何か」についてじっくり考える。

(編集人：瀬邊風馬、中山皓太)

年中行事の意義

年中行事とは何か

「どこに視点を置くかによって何が年中行事に含まれるかが異なる」と石塚修教授(人文社会系)は語る。年中行事には、主に日本で古くから続くもの、中国由来の文化と日本古来の文化が融合したものの、クリスマスやハロウィンといった欧米由来のものなどがある。年中行事を全国的に行われる行事と捉えると、主な年中行事には、お正月、バレンタインデー、ハロウィン、クリスマスが挙げられる。

年中行事と節句

日本には、3月3日の雛祭り、5月5日のこどもの日、7月7日の七夕など奇数の日に年中行事がある。これを節句といい、中国から日本に太陰暦が伝来した際に付随して取り入れられた行事である。

節句は豊かな収穫を祈る行為が儀式化したものであるという。農耕の節目には主に種播き、田植え、稲の成長、収穫がある。無事に野菜や穀物を取獲できるように、また災害に







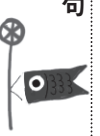


遭わないことという意味合いでも祈る。現在は天気予報などの科学技術の発達により、降雨、大きな台風や洪水、干ばつ、害虫被害が起こるのか予測できるようになった。しかし、農耕が主だった時代では、これらが全くわからなかった。そのため、村の人間の無事や災害が起こらないこと、豊作などを自然に対して祈るという行為が生まれた。

七夕とは

節句の一つに七夕というものがある。これは、中国の乞巧奠(きこうけん)という行事が元となっている。乞巧奠は牽牛星・織女星を祀る儀式で、糸や針の仕事を司る織女に対して手芸や機織りなどの技巧上達を願い感謝するものである。「七夕は節句として農作物の成長を願う祭り」とされていた。今は社会が農耕から離れ、願っても各人の自由なものとなり、特別に技芸の向上を祈る気持ちは見られなくなった」と石塚教授は語る。



節句について話す石塚教授

12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	新暦	
	23日 新嘗祭 	13日 後の月 	9日 重陽の節句 	15日 中秋の名月 		7日 七夕の日 		5日 端午の節句 		3日 桃の節句 	3日 節分の日 	7日 七草の節句 	主な年中行事
11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	4月	3月	2月	1月	12月	旧暦	

変わりゆく年中行事

太陽暦と太陰暦

「日本の年中行事は明治以降、季節との間にズレが生じている」と清登典子教授（人文社会学系）は語る。明治以前、アジア圏は太陰暦を主軸とし、1月から3月を春、4月から6月を夏、7月から9月を秋、10月から12月を冬として季節が巡っていた。

しかし、欧米化に伴い明治政府が太陽暦を採用した。そのため、太陰暦に合わせた行事と太陽暦を基にした季節にズレが生じた。

年中行事と詩歌

平安時代に伝来した年中行事は、宮中の公的儀礼として中国から伝来した。季節の公的行事であり、出席者は詩歌（漢詩や和歌）を作った。それが体系化して季節として定着していったものもある。

伝統的に重要度の高い季節として、春の「花」、秋の「月」、冬の「雪」の3つが挙げられる。夏の重要な季節としては「ホトトギス」という鳥が挙げられる。農耕社会であった頃、ホトトギスが鳴くことは田植えの時期を知らせる重要なものであった。「ホトトギスの声を聞くために、貴族は都から森にでかけ牛車で夜明けまで聞き耳を立てていたとい

う。農耕から離れた現在の社会では、ホトトギスの重要性は低くなつたと言える。授業で夏を代表する季節を質問してもホトトギスと答えられる学生はほとんどいない」と清登教授は語る。

「日本的」感性

中国から伝来した宮中行事の一つに、旧暦8月15日の「中秋の名月」に満月を愛で、和歌や俳諧を詠むというものがある。その後、日本独自の宮中行事として、旧暦9月13日の「後の月」という行事ができた。「後の月」では満月になる前の完全な円形ではない状態の月を愛でて詩歌を作ったという。

「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは（花は満開の時だけを、月は曇りが無いのだけを見るものであろうか）」と徒然草にあるように、完全無欠ではなく少し欠けた状態にあるものを愛でるといふ日本的感性が表れた行事だ」と清登教授は語る。

年中行事の変遷

平安時代以降、武家の勢力の拡大に伴って武士にも年中行事が広まった。戦乱の時代よりも豊かになり生活が余裕が生まれた江戸時代には、年中行事が庶民にまで広まっていた。庶民に行事が広がってから行事は商業化していった。例えば、「上巳の節句」が「雛祭り」として庶民層にも広がり、雛人形を作る人形師という職業が成立したという。

「年中行事のあり方は時代によって変化しながら人々に広がり、大衆化していったといえる」と清登教授は語る。



年中行事の変遷を説明する清登教授

開かれた大学の入り口を リ・デザインする ～入試改革に向けて～



筑波大学では2021年度から新たな入試形態として「総合選抜」が取り入れられる。また、英語民間試験の導入の検討やAC入試における変更など、入試制度はまさに「改革」されている。今回はこれらの「入試改革」を取り上げた。(注：2019年12月1日時点)
(編集人：軽辺凌太、北澤繁人、新谷竜也、瀬邊風馬)

よりよい受験のために考える

「英語民間試験の導入に関する問題について筑波大生にも考えてもらいたい」と名畑目真吾助教(人間系)は話す。2020年度については実施の延期が発表された英語民間試験の導入には、様々な課題が残されているという。

運営側から見た問題の一つとして、従来のマーク式の問題に比べ、「話す力」「書く力」の採点が難しいことが挙げられるという。「誰がどのように採点するのか、その採点者の質をどのように担保するのか不明瞭だ」と名畑目助教は話す。

一方、受験生にとっても問題はある。その最たるものは経済的・地理的な格差の拡大だという。経済的な格差拡大の理由には、共通

テストに加えて民間試験の受験料を受験者側が負担しなければいけないことが挙げられる。また、民間企業による外部試験は、国が定める学習指導要領に基づく必要がないため、予備校などで対策指導を受けられる受験生がさらに有利になる恐れもあるという。地理的な格差拡大の要因には、都市部に比べ地方では予備校や民間試験の受験会場や予備校の選択肢が少なくなってしまうことがある。

「受験生にとって入試がより良いものであるために、この問題に関しては今後も慎重に議論されるべきだ。今は当事者ではなく筑波大生にもこの問題について知ってもらい、考えてほしい」と名畑目助教は語る。

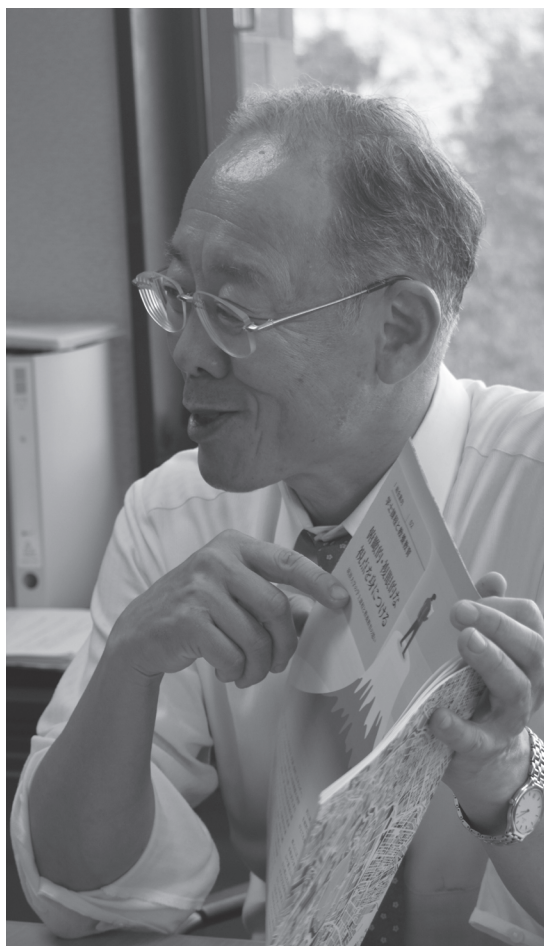


英語民間試験の導入について話す名畑目助教

「総合選抜」への期待

筑波大学ではこれまで「学類・専門学群選抜」を行ってきた。それに加え2021年度から、体育専門学群を除く全ての学類・専門学群で共通の基準により可否を決める「総合選抜」が実施される。現段階では全体の約4分の1の受験生をこの方式で募集することが決定している。「実際には4分の1では終わらないと思っている。今後も『総合選抜』での募集人数を増やしていきたい」と清水副学長（教育担当）は話す。

「総合選抜」の目的は、より幅広い教養教育を通して、俯瞰的で複眼的な視点を養い、主体的に研究する学生を育成することだという。「これからの社会では、様々な学問を組み合わせ新たな分野を切り拓くことが必要



総合選抜の内容を説明する清水副学長

になる。学生にはこのことを考えながら大学生活をデザインしてほしい」と清水副学長は話す。また、「総合選抜」で入学した学生は2年次から学類・専門学群に所属し、その配属先は1年次の成績や履修科目によって決まる。「総合選抜」での受験には、希望する学類・専門学群に進むために自ら可能性に挑戦する気持ちを持つしてほしい」と清水副学長は話す。「各学類・専門学群が自分の熱意にどのように対応してくれるかを探れるという点で、学生にも大きなメリットがある」と清水副学長は話す。また、教員にとっても、学生に自分の学類・専門学群を選んでもらえるよう教育内容を精選する良い機会になるという。

存在意義に合わせて

2021年度入学試験から総合選抜が導入される。それと同時に複数の学類においてA入試が廃止されるが、これには3つの理由があるという。1つ目は、カリキュラムが比較的固定されている学類においては特定の分野に秀でた人材の育成が難しいことだ。「例えば医学群は今でもA入試を導入していないが、これは医学群のカリキュラムが比較的固定されていることが理由である」と大谷奨アドミッショ

ンセンター長（人間系）は話す。2つ目として挙げられるのは、A入試を利用しなくても、推薦入試などを利用することで求める人材を獲得できることだ。A入試は、実施する際の大学側の負担が大きい。そのため、推薦入試で十分に人材を確保できるのであれば、A入試は必要ないという判断だ。芸術専門学群などは推薦入試でも十分専門的な人材を確保できるため、A入試を廃止する判断に至りやすかったという。3つ目は、総合選抜の導入に伴い、学類が独自に採れる人数が減ることだ。実際に、A入試の定員を一般入試に移動させる事態が発生している。この背景には、同じ入試形態で入学した学生が多いほうが人材育成がしやすいことがある。

入試改革では、調査書の得点化も併せて行われる。調査書を得点化する意図として、「一般入試においても主体性を選考基準に入れる

必要がある」と大谷教授は話す。しかし、どの学類（総合選抜含む）においても調査書の得点は総得点の1パーセントから2パーセントにとどまっており、学科試験の得点が並んだ場合の判断基準程度の使い方を検討しているという。「実際に評価基準を見ると、調査書で高得点をとるためのハードルは低く、調査書では平均点の高得点化が予想されている」と大谷教授は語る。このような評価基準にすることで高校等の教師の負担を減らすこともできるという。



AC入試について語る大谷アドミッションセンター長

社会問題解決の “Math”ter Key

【連載特集】各学類・専門学群を知ろう！

「他大学には類を見ない独特な学類」「就職に強い学類」などの印象が強い社会工学類。本記事では、社会問題と工学を結び付ける意義や社会工学類での研究などに迫る。
(編集人：稲富拓人、軽辺凌太、櫻井怜、十川澄)

学びの先は無量大

「地域から国、世界レベルの多岐にわたる社会問題を、数理的アプローチで解決すること」が、社会工学類ならではの特色と言えるのではないかと川島宏一社会工学類長（システム情報系）は語る。

社会工学類には社会経済システム、経営工学、都市計画の3つの主専攻がある。社会経済システム主専攻では社会全体に焦点を当て、経営工学主専攻では企業の経営に着眼して、都市計画主専攻では空間の活用についてそれぞれ学ぶ。いずれの主専攻でも、様々なデータを用いて疑似実験などを行う。その中には大手企業が解析を依頼したデータもあり、「社会工学類は世の中のデータを使った実践的な学びを、学類生のうちから行うことができる学類である」と川島教授は話す。

また、社会工学類はグループワークを多く行っている。そこで学力としての「認知能力」ではなく、グループの同意を引き出すリーダーシップなどの「非認知能力」を鍛える活動を重視しているという。

川島教授は、社会工学類における教員の研究が「分野」よりも「問題解決のメカニズム」を重視して行われていると話す。そのため、経営、防災、環境、医療など、多様な視点から分野横断的な研究が行われているという。研究に用いられるデータは大手企業のものだけでなく、筑波大学やつくば市内で行わ

れた社会実験で集められたビッグデータもある。「社会工学類は大学全体の知見を総括し、社会に活かしていくはたらきを持っているのではないかと川島教授は語る。

社会工学類で培われる力は幅広い分野に応用できるため、社会工学類卒業後の進路はコンサルティングからIT、金融、建築、流通、製造から国家・地方公務員など多岐にわたる。また、自ら起業した企業が上場しそうだという人もいるという。

「社会工学類のコンセプトは、『誰か』のおかげで社会にあふれる問題が解決されており、学生にはその『誰か』になってほしい、というものだ。だから、社会を学生とともに変えていく研究がしたい」



社会工学類の特色を語る川島学類長

魅力溢れる社会工学類

今年度社会工学類に入学した辻栄翔さん（社会工学類1年）はオープンキャンパスで筑波大学を訪れた際、「社会工学類」という名前の響きに惹かれたという。「社会工学類が開催した体験授業の内容も大変興味深いと感じた」と辻さんは話す。また、経済学と絡めて都市計画を行うという他の大学にはない特色にも魅力を感じたため、この学類への進学を決めたそう。

「社会工学類の特色は、数理的思考を用いて社会全体にあふれている様々な問題を解決へと導く力を身に付けていくことにあると思う」と辻さんは語る。

社会をより良くするために

「高校2年生のときに受けた政治経済の授業で、物理や化学と同様に社会にも法則があるように感じ、それが面白いと思った。その時から、世の中を回していく仕組みに興味を持った」と峯岸美礼さん（社会工学類3年）は社会工学類を志したきっかけを語る。

峯岸さんは現在、混雑税についての研究に取り組みたいと考えている。混雑税とは、都市において道路の混雑を緩和するために自動車の使用に対してかける税金のことだ。シミュレーションを行うことで、混雑税が社会に与える影響を検証したいという。

今後は都市計画または経営工学を専攻し、大学院に進みたいと考えているという。「地域にあった最適な社会をつくりたい。そのためにコンピュータで人の動きを最適化し、更に合理的なシミュレーションを行い、社会をデザインしていきたい」と辻さんは話す。



学類の魅力を語る辻さん

「社会工学類には、経営を学ぶ人や図面をバリバリ引く人やコンピュータ実験を行う人など本当に色々な人がいるが、社会問題を解決したいという気持ちは共通している。社会工学類はその気持ちに対して、様々な手法を学ぶ機会を与えることで応えていると思う」と峯岸さんは話す。



今後について語る峯岸さん

2つの災害から

「災害ボランティアセンターが行うボランティアコーディネーターに関する研究をしている」と宮下夏子さん（社会工学類4年）は話す。宮下さんは、災害ボランティアセンターが適切なタイミングで被災地の需要に合った人材を派遣できているか調査している。

宮下さんが災害ボランティアセンターを研究対象に選んだきっかけは2つあるという。1つは、入学して間もない頃に熊本で大規模な地震が発生したことだ。高校時代の友人が被災したことで、災害ボランティアに関心を持つようになったという。

もう1つは、都市計画インターンシップの授業で派遣される予定だった倉敷市が西日本

実践の場を求めて

「社会工学類で学んだことを活かせる実践の場を求めて大学院に進学することを決めた」と佐藤風悠さん（システム情報工学研究科社会工学専攻2年）は話す。学類では興味のある社会問題について仮説を立て、大学生を対象に調査・分析を行っている。それに対し、大学院では、現実社会における様々な事象に関する実データを用いた分析ができ、より実践的であるという。

佐藤さんは、企業で働く上でモチベーションを向上させるための方法を、組織心理学の考え方をとって研究している。学類生の時に

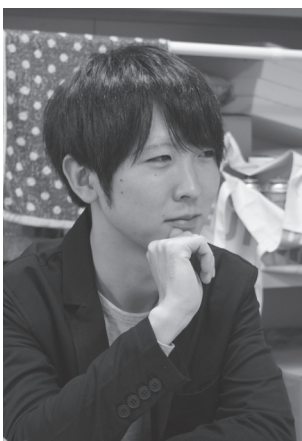
豪雨で大きな被害を受けたことだ。被災した影響で、宮下さんは予定していた倉敷市役所でのインターンシップではなく災害ボランティアに参加した。派遣先で会った人のボランティアに関する不満や、ボランティアに対する考え方の違いが印象的だったという。

「大学院では卒業研究をさらに発展させ、将来は地元の自治体の都市計画課に就き、地元のインフラに携わりたい」



きっかけについて話す宮下さん

身につけた数学・統計学的手法を用いた説明力や、プレゼンテーション能力は研究を行う上で役に立っているという。「今後は、実践力を武器に企業で活躍していきたい」と佐藤さんは語る。



大学院について話す佐藤さん

全代会 活動報告

9月

30日

つくば市長と

筑波大学学生との

懇談会

つくば市長と筑波大学学生との懇談会



つくば市の将来像や展望を語るつくば市長

日時…9月30日(月) 18時30分
 場所…大学会館レストランプラザ
 出席…つくば市長、つくば市の職員、
 全代会の構成員、他

○実施内容

9月30日(月)、大学会館1階大学会館レストランプラザ(筑波デミ)にて「第7回つくば市長と筑波大学学生との懇談会」が開催された。この懇談会はつくば市長およびつくば市役所職員と筑波大学学生の意見交換や交流を目的として年に一度開催されているものである。

本懇談会は2部構成で行われた。第1部では、本学のOBで現職の五十嵐立青市長が講話した。つくば市長になった経緯にはじまり、市長が見据えるつくば市の行く末や展望を語った。

第2部では、市長から学生への質問によって始まる意見交換が行われた。つくば市について学生が感じていることに関して市長が質問し、それに対して学生からの意見が出されるという流れで進化した。質問内容としては「卒業後にもつくば市に住みたいか」や、「つくば市に何が必要か」など、つくば市のこれからの重要なことが主だった。全体を通して市長と学生間で活発な意見交換が行われた懇談会となった。

昨年度は学生がつくば市への要望や質疑を投げかける形式が主に取られたが、今年度は対照的につくば市側から問いかける形式が主となった。また、一昨年度までは参加する学生が一部に限られていたが、昨年度から一般学生の募集も積極的に行い、今年度は33人の学生が参加した。

10月

2日

第二回意見聴取会

9日

第四回本会議

31日

セントラルルゾン
州立大学との
交流会

11月

6日

第三回意見聴取会

■第二回意見聴取会

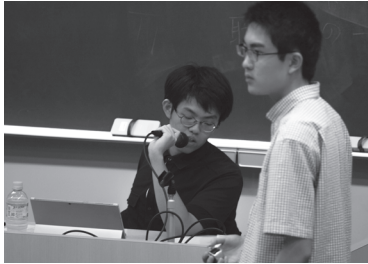
日時…10月2日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…39人

議題
『学園祭実行計画書追加提出分について』

○議題について

「令和元年度学園祭開催の要請」として、学園祭実行計画書追加提出分を主に審議した。

学園祭は創設以来、学生の総意として開催を大学に求めている行事である。ゆえに学園祭の主権は学生を代表する組織である全代会と定義されており、全代会の下部機関と規定されている学園祭実行委員会から学内行事委員会を通して提出された開催要請に対し、全代会が学生の代表者として開催の可否を判断している。本会議の議決によってこの要請が承認されると、正式に全学の総意として学園祭の開催要請が学長に提出される。



第二回意見聴取会の様子

例年は学園祭実行計画書(一次提出分)についても本会議にて議論されていたが、昨年の「学園祭に関する申し合わせ」改訂に伴い、一次提出分については学内行事委員会と議長団によって審議されることになった。なお一次提出分については、学内行事委員会と議長団により承認済みである。

第二回意見聴取会の中では、学園祭実行委員会臨時席のもと、二次予算案の内容や消費税増税前後の税込計算についてや、運営要領の内容についてなどの質疑が行われた。昨年は企画一覧やポスター依頼リストに関する質問もあったが、今年はそのような質問はほぼ見受けられず、学園祭の実行計画全体に関する話題や、二次予算案に関する質問が大半を占めた。昨年に比べ、会議時間も大幅に短くなり、大きな混乱は見られなかった。

この意見聴取会で集まった意見をもとに、実行計画書の訂正等が行われた。その後本会議にてさらに議論されたのち議決にかけられ、学園祭開催の可否について判断される。



第二回意見聴取会の様子

■第四回本会議

日時…10月9日(水) 18時30分
場所…5C506
出席…51人

議題
『令和元年度 学園祭開催に関する要請』

承認…51
否認…0
保留…0

↓全会一致で可決

○議題について

第二回意見聴取会に引き続き、「令和元年度学園祭開催の要請」として主に学園祭実行計画書追加提出分について審議した。

第四回本会議では主だった質問・意見等はなく、そのまま採決へ移った。今年度の学園祭については、右に示した通り全会一致をもって承認された。学園祭実行委員会尽力の中、読者の方々ご承知の通り学園祭は開催され、前夜祭から後夜祭の火花に至るまで大きな混乱なく終了した。



第四回本会議の様子

■第三回意見聴取会

日時…11月6日(水) 18時30分
場所…5C216
出席…34人

議題
『令和元年度副学長等と全代会 構成員との懇談会の話題について』

○議題について

議題の「令和元年度副学長等と全代会構成員との懇談会の話題」について、全代会が副学長等に伝える意見をまとめる目的で審議された。審議の内容は、来年度のオンラインピック開催に伴う授業変更に関するものである。

審議では、教職員が既にスケジュール調整を行ったため、土曜授業の撤回は、より混乱が拡大するという結論に至った。そのため、土曜授業は行うものとし、アンケートをもとに、授業と課外活動が重なる学生がいる場合など、公欠を認める基準について審議した。また、公欠を認める場合の申請手続きについてや、どういった団体を課外活動団体として認めるか、土曜日に開設している集中講義は外部講師を呼んでいるものもあるかどうか対応するのかという意見が挙げられた。



第三回意見聴取会の様子

■セントラルルソン州立大学との交流会

日時…10月31日(木) 15時30分
 場所…1D棟3階北会議室
 出席…全代会議長団、学内行事委員長、セントラルルソン州立大学学生自治組織

○実施内容

フィリピンのセントラルルソン州立大学の筑波大学表敬訪問に合わせ、全代会とセントラルルソン州立大学学生自治組織 (Supreme Student Council) との交流会が行われた。筑波大学とセントラルルソン州立大学は2014年より国際交流協定を締結している。

交流会には、全代会から議長団を含む5人が参加した。全代会の概要説明を軽辺凌太副議長(地球学類2年)が行った。セントラルルソン州立大学からは Angel Paulo A Mendaza 議長によるスライドを用いた学生自治組織の説明と、大学行事を紹介するビデオ上映が行われた。



全代会概要説明を行う軽辺副議長



Supreme Student Council についての説明



名刺交換の様子

どのような活動を行っているのか」という質問があった。それに対して、セントラルルソン州立大学からは、経済支援セミナー等、学生支援を自主的にやっているという回答があった。

最後に名刺交換が行われ、その際に今後も交流を行っていきたいと双方が述べた。全代会では現在、グローバル・コモンズ機構の協力の下、セントラルルソン州立大学への訪問および、学生交流と学生自治組織活動の視察を計画している。

謹賀新年

本年も様々な課題が待ち受けております
 引き続き、努力を重ねてまいりますので
 全代会をより一層お願ひ致しませう

全学学類専門学群代表者会議 議長 瀬邊風馬

～教育生活環境調査～

調査委員会では、教育環境・生活環境に関する学生の皆さんの身の回りの問題点について調査しています。

<https://forms.gle/hKDgDQcAyWetzex17>

アンケートに関するお問い合わせは調査委員会 (zdkres@gmail.com) まで



詳しい情報はこちらから

↓全代会 HP の URL はこちら↓

<https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>

ご連絡はこちらへ: zdk@stb.tsukuba.ac.jp



専門委員募集中!

委員会	活動日	活動内容
総務委員会 事務部門 / 情報部門	火	全代会の活動の補佐及び情報の管理を行う
学内行事委員会	木	全代会と学内の行事を運営する関係組織を繋ぐ
教育環境委員会	火	全学的な教育環境に関する問題について取り扱う
生活環境委員会	木	学生の生活に関する問題について取り扱う
調査委員会	月	全代会として取り組むべき問題の調査・報告をする
広報委員会 編集部 / 制作部	木	全代会の広報と学生に有益な情報を発信する

Campus

全代会の広報誌
Jan. 2020

No. 220
2020年1月8日発行

記事制作者より

広報委員会に入らないか、と学類の友人に誘われたのは今から約2年程前のことだ。当時、先輩と同期を合わせメンバーは10人もいなかったと記憶しているが、今年は部屋の椅子が足りなくなるほど多くの1年生が加入してくれた。

私は今号で広報委員会を卒業する。この2年弱を通し、広報委員会やCampusにどれほど貢献できたのだろうか。Campusがこれからも多くの人に愛されるものであるよう願うばかりだ。

【北村夏海】

表紙制作者より

約2年前、何も持たない私を温かく迎え入れてくれた広報委員会。いつも周りのことを考えて行動している素敵な人ばかりで、多くのことを教わった。後輩たちの思いが詰まったCampusがたくさんの人の手に渡りますように。

【鈴木瑠夏】

広報委員会に入って2年半、制作部長になって2年が経った。今号をもってついに引退だ。楽しいことばかりではなかったが、今となっては最後まで続けてよかったと感じる。迷惑をかけたこともあったが、2年間制作部長としてやってこれたのも、先輩、同期、後輩が支えてくれたからではないかと思う。私を支えてくれた方々に感謝をしながら引退したい。

【西堀涼香】

編集後記

これまで2年半、なんで私ここまでで苦しまねばならないのかと思つて業務をこなしてきた。同時に得たものもある。共に戦った私の同期らのありがたさ、関わる人や後輩と連絡を密に取る必要性、あえてだる絡みをする勇氣：今はここに残つてよかったとさえ思っている。最後にこれだけは伝えておきたい。大変お世話になりました、と。

【十川澄】

BACK NUMBER



Campus No.219 2019/10/01

特集：この大学は森なのか

あなたのとりの社会科学／全代会の2019年度全代会活動報告



Campus No.218 2019/04/01

特集：平成の変遷

広がる看護、繋がる看護／全代会概論全代会活動報告



Campus No.217 2019/01/08

特集：冬を上手に乗り越える

災害大国の羅針盤／知識の海に潜る全代会活動報告



Campus No.216 2018/10/02

特集：筑波山再考

共生社会の実現に向けて／全代会の2018年度全代会活動報告

STAFF

編集人	十川澄	
発行人	軽辺凌太	
表紙デザイン案	新真澄	
編集委員	新真澄	多田菜月
	稲富拓人	近森正太郎
	軽辺凌太	中山皓太
	北川汰知	西堀涼香
	北澤繁人	村松真緒
	北村夏海	
	櫻井伶	
	新谷竜也	
	鈴木泰我	
	鈴木葉菜	
	鈴木瑠夏	
	瀬邊風馬	
	十川澄	
	高島亮	

発行 全学学類・専門学群代表者会議
広報委員会



<https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>
zdk@stb.tsukuba.ac.jp

バックナンバーは1学食堂内のボックスで配布しています。
ウェブ版『Campus』公開中 <https://www.stb.tsukuba.ac.jp/~zdk/home/>

広報委員会では随時専門委員を募集しています。興味のある方は上記のメールアドレスまでご連絡ください。